

組織
埋れ
織に
ず

高杉
良



組織に 埋れず

高杉
良

講談社

組織に埋れず

定価はカバーに表示してあります。

第一刷発行 一九九六年一月二日

第二刷発行 一九九六年一月三〇日

著者 高杉良

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社 講談社

〒112-01 東京都文京区音羽二―二―二

出版部 〇三―五三九五―三五〇五

電話 販売部 〇三―五三九五―三六二二

製作部 〇三―五三九五―三六一五

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 島田製本株式会社

落し本・乱し本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第二出版部宛にお願いいたします。本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き禁じられています。

組織に埋れず^{うも}

目次

第一章	神戸・本山南中学校で	7
第二章	添乗員失格	48
第三章	転職希望	89
第四章	如水会・欧州旅行	103
第五章	二人だけの結婚式	113
第六章	年金ツア―	124
第七章	回想 放浪旅行	162

第八章 “積み立て旅行” 181

第九章 デパート共通商品券 203

第十章 初めての部下 231

第十一章 七年がかりの大事業 252

第十二章 “アーバンクラブ”で 284

第十三章 開発つきることなし 305

装丁 安彦勝博
写真 世界文化フォト

組織に埋れず

第一章 神戸・本山南中学校で

1

午前五時に目覚しのラジオで起こされた。いつもより三十分早めに仕掛けておいたのだ。
丸山敏治は点灯して急いで身仕度した。隣のベッドに妻のヨリイはいなかった。昨夜まで反対していたが、結局折れたようだ――。

丸山は日本交通公社に勤務している。通称JTB。従業員約一万人、年間取扱高一兆五千億円、世界一のマンモス旅行会社だ。昭和二十四年（一九四九年）三月一日生れだから、きょうは平成七年（一九九五年）二月四日土曜日。現在には満四十五歳だが、ひと月足らずで四十六歳になる。いわゆる団塊の世代である。ポストは市場開発チーム・チームマネージャー。名刺の裏側は英語で、"JAP AN TRAVEL BUREAU GENERAL MANAGER"とあるので、部長クラスとすることだろう。新事業、新商品の開発を担当し、会社経営や組織運営の仕組みなどの立案にも関与している。

丸山が出し抜けに「神戸に行ってくる」と言い出したとき、ヨリイは美しい顔を翳^{かげ}らせた。昨夜も二人はやりあった。

「物見遊山^{ものみあそびさん}や興味本位の気持ちがあつたでもあつたら、被災者の反感を買うだけよ」

「そんなんじゃない。旅行業で禄^{ろく}を食^はんでる者として、今世紀最大級の大震災の現場はぜひこの眼で見ておきたいし、ポランティアとして少しでもお役に立てれば、っていう気持ちだ。神戸は観光資源としても大切なところなんだ。それにJTBの三宮^{さんのみや}の店も相当被害を受けたらしいんだ。居ても立つてもいられない気持ちなんだよ」

「ポランティアの経験のないマルさんが、なんの役に立てるっていうの。かえって邪魔になるだけなんじゃないかしら。毎日テレビで見てるので分かるけど惨状の現場で、きつとマルさんはうろろするだけだと思う。心配だわ」

「ヨッちゃんの言つてることも分からなくはないけど、ヨッちゃんと一緒に行つてくれと頼んでるわけじゃないよ。行くのは僕なんだ。とにかく行かせてもらおう」

丸山はにこつと笑いかけてから、リビングのソファから立った。包み込むような笑顔である。これにヨリイはいつもたぐり込まれてしまう。

釈然としないことおびただししいが、言い出したら引かない――。

丸山は眼も鼻も口も大きい。ひたいが広く彫の深いポリネシア系のエキゾチックな面立ちだ。肌は浅黒い。身長百六十九センチ、体重五十六キロのスリムな体型は父親譲りだが、毎日欠かさず続けている早朝のジョギングで研^{みが}きをかけているので、体力には自信があつた。

丸山が妻を「ヨッちゃん」と呼ぶのは、結婚前に当人から聞いたヨリイの由来がおもしろかったからだ。

ヨリイの出身地は、新潟県長岡だが、新潟地方では「イ」を「エ」と、「エ」を「イ」と発音する。駅はイキになり、域はエキになる。

父親はヨリイをヨリエのつもりで、役場に出生届けを出した。つまり音読みで通したことになるが、新潟ではヨリエでも東京では誰もヨリエとは呼んでくれない。

「ヨッちゃん」は恋人時代の名残りである。対抗上、ヨリイも「マルさん」になる。

丸山夫婦は結婚して十八年になるが、子供たちの前でも「マルさん」「ヨッちゃん」とやっている。丸山一家は、足立区梅田のマンションに住んでいた。

丸山一家は、足立区梅田のマンションに住んでいた。八階建のマンションは下町では突出して高いほうでさえざるものがない。丸山家は最上階だから晴れた日は富士山が望見できる。それが気に入って、十年ほど前にローンを組んで中古マンションを購入した。

リビングが広いのも取り柄で、3LDKのスペースは二十六坪ほどだ。

丸山がトイレを終えてリビングに行くとき、ヨリイがキッチンから食卓にシナモン・ティ、トースト、サラダなどをトレイに載せて運んできた。

「おはよう。早起きさせてごめん」

「いつもとそんなに変わらないわ。マルさん、急がないと」

「うん」

「真空パックのごはん、リュックに入れといたわよ。毛糸の下着も持って行ったほうがいいと思う。ついでに入れといたわ」

丸山はうれしそうに返事をした。

「サンキュウ、サンキュウ」

あんなに反対してたのに、いざとなるとあたたかく送り出してくれる。

夫の見送り出迎えに万全を期することは結婚以来、ヨリイの信条でもあった。丸山の帰宅がどんなに遅くなっても、先に寝ることはなかった。厭な顔を見せたこともない。

ヨリイが起きて待つてくれるので、丸山も会食後の二次会をなるべくつきあわないようにしていた。

だからといって、ヨリイはかしづくタイプでもない。意思表示は明瞭、明確で、神戸行きでもそうだった。「行く」「行かないで」の議論も一日や二日ではなくヨリイは執拗に反対した。小柄できゃしゃな体型、色白で優しい顔に似合わず芯の勁さは、丸山に一步も引かない。似た者夫婦である。

ひとたび決断したら実行する――、それが丸山の流儀であった。決断するまでは熟慮するほうだから、思いつきで行動することはない。

反対し切れない予感は初めからヨリイの側にあった。

丸山はそそくさと食事を摂った。

「五時半か。ぎりぎりだな」

丸山は急いで寝室に戻り、棚にある二葉のスナップ写真に向かって「行つてきます」と、声に出して挨拶した。帰宅のときは「ただいま」である。杯の水は毎朝ヨリイが起き抜けに取り替える。季節の切り花も欠かさない。

四人の親は二人をこの世に送り出してくれた恩人であり、敬愛してやまない。神に近い存在である。いずれの両親も農業を営み、目立たない普通の人だが、心の広い、優しい人だった。四人の中で、生存しているのは丸山の実父だけである。

ヨリイは、通勤のときも必ずマンションの玄関まで丸山を見送る。

丸山は、耳まで覆えるコージュロイの厚手の帽子を脱いで、お辞儀をした。大きめのひさは赤色である。

「行ってきます」

「行つてらっしゃい。あなた、気をつけてね」

ヨリイが「あなた」と呼ぶときは、愛情を籠めた証左である。

丸山が、ヤツケ、ジーンズ姿で、テニスシューズを履き、登山用の大きなリュックサックを背負つて家を出たのは、五時三十二分だ。あたりはまだ暗かった。車も少なく歩いているのは丸山ひとりだけだ。吐く息が白い。

マンションから東武伊勢崎線梅島駅まで徒歩五分足らず。上野駅で山手線に乗り換え、浜松町駅で下車し、モノレールで羽田空港へ。所要時間は約一時間。

会社には二日間の有給休暇を届け出てある。

土、日を含めて四日間のボランティア活動をしてくるつもりだが、ヨリイの言うとおりの無謀な行動かもしれない。

「せめてボランティアをする行先を決めてから、出かけるべきだと思う」ともヨリイは言ったが、「行けばなんとかなるさ。人手はいくらあつてもいいんだから」と、丸山は言い返した。

丸山は職場の周辺で、神戸のボランティアについて、それとなく打診してみた。関心を示した者もいるにはいたが、仕事が忙しいサラリーマンは、なかなか日程の調整がつかない。チームを形成することが困難と分かつてからは、「神戸行」を口にできなくなった。独りで行くしかないとすれば、スタンドプレイと取られかねない。

「結局、《ブラブラ社員》の僕が独りで行くしかないようだ」と話したときから、ヨリイの猛反対が始まったのである。チームで行くのなら、もう少し計画的であるはずだ、とヨリイが考えるのも当然だ。

《ブラブラ社員》は、丸山の自称で、いわば謙遜に過ぎない。部下を持つ部長クラスで《ブラブラ》はあり得ない。

もっとも、丸山の神出鬼没ぶりは、《ブラブラ》に通じるかもしれない。行動力が抜群なのだ。

《神戸行》も丸山の行動力を示して余りある。

数多^{あまた}のサラリーマン、並のサラリーマンには真似^{まね}はできない。

空港のチェックで、リュックサックの中からガスボンベを没収された。気圧の関係で危険物と認定されたからだ。

登山ナイフは一時預りとなった。登山用具の専門店ではか買えない大型のナイフで、木も切れるし、附属機能も多い便利なものだ。もっとも、あとで分かったことだが、ガスボンベもナイフも不必要だった。

JAS（日本エアシステム）2011便A300機は定刻の午前七時十分より十五分ほど遅れて羽田空港を離陸し、八時半に大阪伊丹空港に着陸した。

2

丸山は突然睡魔に襲われ、空港ロビーのベンチで一時間ほど睡眠を取った。前夜、残業で帰宅が遅

くなつたうえに、ヨリイの最後の抵抗にあつて、寝不足だった。

居眠りは丸山の特技である。会議中でも船を漕ぐ。退屈な会議に限るが、それもほとんど熟睡に近い。

フライトでもほとんど眠っていたが、まだ足りなかったのだ。

ロビーを出ると、鼻がつんつんするほど外気が冷めたかった。風は強く、空は抜けるように青い。十時にリムジンバスで阪急伊丹駅に向かったが、駅が倒壊していて、新伊丹駅までの一區間が不通になっていた。鉄路がずたずたに切断されていることを、さつそく身を以て教えられたわけだ。

丸山は、JR西日本の井手社長が「今度の地震で鉄道魂を呼びおこされた。鉄路がつながっていることの信頼感はないものにも替え難い」と語っていた、と誰かに聞いた覚えがあつた。井手社長は震災後、運転席に乗り込んで、現場の先頭に立っている、とも聞いた。

伊丹―新伊丹間の臨時バスの中で、丸山は「鉄路の信頼感」を実感したことになる。

臨時バスから眺めた街のたたずまいは、思いがけず平靜だった。

新伊丹駅から西宮北口駅にしのみやぐちへ向かう電車の中で見る沿線の景色も、さほどの変化はなかった。

西宮北口駅の改札口を出て、向かつて右側の窓ガラスの貼り紙の一つに「乞うボランティア。食事あり泊れます」とあつたのが丸山の眼に入った。もちろん連絡先の電話も書き込んであつた。

丸山は駅前の公衆電話から電話をかけた。

078-412-2033。電話はすぐにつながった。

「もしもし……」

若い女性の声が返ってきた。

「はい。本山南中学校です」
もとやまみなみ

「東京からきた丸山という者ですが、いま西宮北口駅で貼り紙を見て、電話をかけさせていただきま
した」

「ボランティア志望のかたですか」

「そうです」

「歓迎します。五分ほど歩くとバス停があり三宮駅行の臨時バスが出てますから阪急岡本駅で降りて
下さい。学校はすぐわかります」

「わかりました。どなたをお訪ねすればよろしいのでしょうか」

「来れば分かります」

多忙をきわめているせいで、事務的にならざるを得ないのだろう。

バス停は長蛇の列が延々と続いていた。五、六百人はいると思える。

臨時バスは引っ切りなしに発車するが、それでも丸山は四十分ほど待たされた。ひどい渋滞であ
る。しかもバス停とバス停の間隔が短いため、岡本駅まで一時間近く要した。電車なら三つ目の駅な
ので、十分もあれば着くだろう。満員のバスの真ん中に立たされた丸山は、あいにく外の景色がほと
んど見えなかった。それに、足下におろした大きなリュックサックも気になる。

息を呑んだのはバスを降りてからだ。

おびただしい瓦礫がれきの山。ぐしゃっと潰れた木造家屋。崖崩れや横倒しの電柱。道路の亀裂も至ると
ころにみられる。

本山南中学校は昭和六十三年（一九八八年）に開校した。堅牢けんろうな建物とみえ、マグニチュード7・
2の大地震にも耐えた。もっとも活断層の亀裂がよけてくれたとも考えられる。

学校を外からぐるっと一周すると、裏門の鉄扉てつびが横に倒れ、石垣の上のほうが崩れていた。